

自己有用感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 —高齢期を対象に—

伊藤 裕子*・山崎 幸子**・相良 順子***

本研究は、おもに 60～70 代の高齢期男女を対象に、自分が役に立っているという自己有用感尺度を開発し、信頼性・妥当性を検討することを目的とした。男性 387 名、女性 391 名、計 778 名(60～87 歳)が、自己有用感、主観的幸福感、達成動機について尋ねられた。自己有用感 12 項目には高い内的一貫性があり、予測的妥当性として主観的幸福感と、併存的妥当性として達成動機と男女とも高い関連がみられた。また、自己有用感 は女性が男性より高く、60 代で低く、70 代で上昇し、80 代でも極端な低下はみられなかった。自己有用感が女性において高い点について、ジェンダーの視点から論じられた。

Key words: 自己有用感, 尺度の信頼性・妥当性, 高齢期

近年におけるわが国の平均寿命の伸びは著しい。医療および食事情等の向上により、2017 年の簡易生命表によれば、女性は 87.26 歳、男性においても 81.09 歳で過去最高を記録した(厚生労働省, 2018)。また、65 歳以上の者のいる世帯構成でみると、家意識の衰退から(e.g. 井上, 2003; 小林, 2008; 落合, 1997)、三世帯世帯が減少の一途をたどり、夫婦世帯あるいは単独世帯が増加している(内閣府, 2018)。健康で活力があり、さまざまな活動に従事している世代が生まれた。

ここでいう高齢期とはおもに前期高齢期をさすが、若本・無藤(2006)はこの世代を「ポスト中年期」と呼んで、高齢期として扱うよりも、中年期の延長とみた方が適切だということを主張した。また、この時期は「余暇活動」として心理学に限らず多く研究されているが、退職後の人々にとって、彼らの人生を余暇(余った時間)としてみてよいのかという問題がある。さらに、ジェネ

ラティビティ(generativity)はこれまで中年期の課題とされてきたものが(Erikson, 1950/1977)、長寿命化によって健康で活発な高齢者が増加していることから、高齢期においても重要な発達課題となっている(e.g. Cheng, 2009; 丸島・有光, 2007; 田淵・中川・権藤・小森, 2012)。中年期の課題が高齢期に移行してきているといえる。

2017 年には日本老年学会、日本老年医学会が前期高齢者を「准高齢者」と位置づけることを提言し、個人差はあるが前期高齢者が医療や介護を必要とする弱者でないことを知らしめた。実際、中年期から高齢期にかけて、60 代 70 代の人たちはシニアと呼ばれ、活力にあふれ、さまざまなことにチャレンジする高齢者とみなされ、市場の対象にもなっている。これらの人々は世界的に見ても、第二次世界大戦後、出生率が急増した世代だからである。

サクセスフル・エイジングにかかわる要因は健

* 人間学部

** 人間学部心理学科

*** 聖徳大学

康，収入，交友関係以外にもいろいろ検討されているが（Rowe & Kahn, 1997），なかでも「自分には役割がある」「自分は役に立っている」という自己有用感（sense of self-usefulness）が重要と思われる。人は社会を形成し，周囲の人や社会に必要とされることで人としての実感が持てると考えられる（e.g. 更科, 2018; 佐藤・齊藤・芳賀, 2011）。そのよい例が青年期を中心にした居場所感で，教育臨床や心理臨床の視点から，学校適応，心理的適応が多く論じられてきた。人から受け入れられているという被受容感，安心できる，自分らしくいられるという安心感・安定感，自信がもてる，うまくやれるという自己肯定感などが居場所感を構成する要素であろう（e.g. 杉本・庄司, 2006）。石本（2010a）によれば，居場所感とは日本で特有に使われる言葉で，1980年代ごろより不登校・学校適応問題への対応に関連して使われるようになり，現在では物理的な空間を指すだけでなく心理的な意味も表すようになり，一般的には快感情を伴う場所，時間，人間関係等を指して用いられているという。

しかし，これらは決して青年期特有のものではなく，子産み・子育てや就労など社会的役割を一通り終えた高齢者にとっても必要な感覚と思われる（e.g. 伊藤・相良, 2013）。文部科学省国立教育政策研究所（2015）によれば，「自己有用感」とは，他人の役に立った，他人に喜んでもらえた等，相手の存在なしには生まれてこない点で，自尊感情や自己肯定感とは異なるという。もちろん自尊感情が基底にはあるが，他者からの評価やまなごしに強く規定されるものであることは否めない（e.g. 伊藤・阿部・菰田, 2005; 若本, 2010）。高齢者研究では自己有用感なるものが単項目で使われているが（Gruenewald, Karlamangla, Greendale, Singer, & Seeman, 2007; 杉井・本村, 1992），尺度としてはない。

サクセスフル・エイジングに関連して，高齢者研究では必ず高齢者のQOLが取り上げられ，従属変数として精神的健康が論じられる。高齢期になっても幸福度は低下しないことを“well-beingの逆説”（Mroczek & Kolarz, 1998）といい，その後，多くの研究者が実証してきた（e.g. Stone,

Schwartz, Broderick, & Deaton, 2010; 若本・無藤, 2006）。精神的健康としてモラルスケールが用いられることが多いが（e.g. Loke, Abdullah, Chai, Hamid & Yahaya, 2011; 杉井・本村, 1992），この尺度は高齢者の主観的幸福感を表す尺度として標準化されている。また，精神的健康の測度としてWHOが作成し，伊藤他（2003）が社会人を対象として標準化した主観的幸福感尺度では，職場満足度，家計収入満足度，夫婦関係満足度のいずれとも高い関連を得ている。本稿で取り上げる自己有用感がこの主観的幸福感と高い関連がみられるかを明らかにしたい。

一方，自己有用感とは「自分も人の役に立つことができる」など達成意欲と関連すると考えられる。その意味でジェネラティビティと関連がみられるだろう。Loyola Generativity scale（McAdams & de St. Aubin, 1992）の日本語版（田淵他, 2012）と堀野・森（1991）の作成した達成動機尺度との関連をみると，男女とも高い関連がみられた（相良・伊藤, 2014）。特にジェネラティビティの下位尺度である社会貢献の意志は内容こそ異なるものの他者の存在を前提とした内容で，本研究の自己有用感が達成動機と関連がみられることを明らかにしたい。

わが国では高度経済成長期に青年期を生きた団塊の世代は，一方に平等意識を持ちながら，産業構造の転換もあって性別役割分業が著しく（落合, 1997），それは退職後の高齢期になっても変わらない。子どもが離家した後は，夫婦二人で過ごす世帯が増加し，期間も長期化している。結婚コミットメントでみると，規範的コミットメントが非常に高く，しかし，人格的コミットメントも高い規範型（伊藤・相良, 2017）は，わが国の夫婦に特徴的であり，かつ高齢期に特有のものでもある（Ito & Sagara, 2016）。男性の場合，結婚の質より結婚していることそのものが重要になってくるといわれるが（e.g. 稲葉, 2008; 伊藤, 2008; 宇都宮, 2014），夫と妻で，また，配偶者の有無によって結婚の質や自己有用感が異なってくることが考えられる。労働力不足から「女性の活躍」が声高に叫ばれるが，中年期の現役世代とはまた違ったジェンダー観によってこの世代をとらえなければ

ならない。

以上より本研究では、おもに 60 代 70 代の高齢期男女を対象に、自己有用感の尺度を開発することを目的とし、併せて尺度の信頼性・妥当性を検討することを目的とした。

方 法

調査対象

首都圏の 2 つの大学主催の生涯学習講座受講者、女性限定のスポーツクラブ会員、個人が主催するハイキングクラブ会員、自治会役員、NPO 会員、シルバー人材センター会員に調査票（本人とその配偶者¹⁾）を配布した（800 組 1600 票）。対象者は生涯学習講座受講者とその配偶者が多かったため、男女とも高学歴の者が多く²⁾、学歴を大卒以上の者を除いて web 調査（(株) 楽天に登録する 60 ～ 70 代の男性 200 名、女性 150 名）を依頼した。有効回収票は、男性 415 名、女性 469 名、計 884 名で（回収率 45.3%）、平均年齢は男性 69.1 歳 ($SD=6.6$)、女性 67.4 歳 ($SD=7.6$)、平均結婚年数は男性 40.1 年 ($SD=8.4$)、女性 39.2 年 ($SD=9.9$) であった。

調査方法と時期

配布は、一部を除いて直接、回収はすべて個別で郵送（後納）によった。封筒に男女別々に封入して依頼状を添え、回答後すぐ封ができるシール付で、配偶者がいない場合は本人のみの回答でよいことを記した。調査は 2018 年 6 ～ 11 月に実施された。

倫理的配慮

調査への協力は任意であり、回答したくない項目には回答しなくてよいこと、すべての回答は統計的に処理されるので個人の回答が特定されることはないこと、回答送付をもって依頼に同意したとみなす旨を依頼状に明記した。なお、本研究は文京学院大学・聖徳大学の倫理委員会による審査によって承認を受けた。

分析対象者の属性

集められた調査票は 40 ～ 80 代で、高齢期を対象とするため 60 ～ 80 代³⁾ までを分析対象とした（89.9%、男性 387 名、女性 391 名、計 778 名）。平均年齢は男性 69.8 歳 ($SD=6.1$)、女性 69.3 歳 ($SD=5.8$)、配偶者と同居している者が男性では 85.3%だが、女性では 66.4%で、死別している者が女性で 19.1%いた。学歴は、男性で最も多いのは高卒で 51.4%、次いで大卒の 27.4%、女性で最も多いのも高卒で 42.3%、次いで短大卒の 35.6%であった⁴⁾。就業形態は、男女とも最も多いのは無職で、男性 45.7%、女性 70.5%、次いでパート・アルバイトで、男性 15.6%、女性 14.2%、常用雇用はわずかであった。大半は職をもっておらず年金暮らしだが、収入満足度は「まあ満足」が最も多く、男性 34.4%、女性 46.4%、次いで「どちらともいえない」が男性 27.4%、女性 24.4%、「やや不満」「とても不満」は併せて男性 29.5%、女性 16.9%だった。

分析の測度

取り上げた測度は大別して、高齢期の自己有用感と妥当性検討のための測度（主観的幸福感、達成動機）であった。

自己有用感 自己効力感ではあるが「自分にも人の役に立つことができる」という感覚で、他者の役にたった、他者に喜んでもらえたなど、相手の存在なしには生まれてこない点で自尊感情や自己肯定感と異なる（文部科学省、2015）。日本では主に青年期の居場所感尺度を構成する一因子として作成されている（e.g. 石本、2010a; 杉本・庄司、2006）。高齢者においては、これまで単項目で使用されているが（e.g. Gruenewald, et al., 2007; 杉井・本村、1992）、尺度として作成されておらず、自分が家族や社会に役立っているという感覚が高齢者を支える基盤になっていると考えられる（杉井・本村、1992）。石本（2010a）の自己有用感と本来感の 2 因子のうち下位因子である自己有用感と、栃木県総合教育センター（2013）の 4 側面（承認、貢献、存在感、関係性）を参照し、また、これらでは家族、友人、恋人について回答を求めるなどの方法だが、高齢者はさまざまな場面

Table1 自己有用感 主成分分析結果, 各項目の男女別平均値とSD および検定結果

項目内容	第一主成分	男性(n=385)	女性(n=390)	F 値	η^2
私は周囲から感謝されていると思う	.845	3.16(0.80)	3.33(0.82)	8.28**	.012
自分の存在が周囲から認められていると感じる	.842	3.32(0.80)	3.44(0.80)	4.26*	.005
自分が必要とされていると感じる	.824	3.34(0.83)	3.70(0.80)	18.19***	.030
私は周囲から関心をもちられている	.816	3.00(0.84)	3.13(0.82)	4.65*	.006
私がいることで周囲の人々の心の支えになっている	.812	3.13(0.81)	3.48(0.85)	34.30***	.059
私は社会に役立つ人間だと思う	.806	3.17(0.85)	3.18(0.84)	0.02	.002
私は周囲から信頼されていると思う	.801	3.46(0.78)	3.60(0.77)	6.33*	.008
私は社会の重要な一員だと思う	.781	3.12(0.88)	3.24(0.90)	3.76+	.006
私は社会から必要とされる存在だと思う	.750	3.19(0.83)	3.16(0.84)	0.22	.001
自分には役割がある	.716	3.50(0.90)	3.82(0.83)	26.26***	.049
自分がいなくて周囲の人（ペット）は困ると思う	.711	3.17(0.95)	3.59(1.00)	35.91***	.086
自分がいなくて周囲の人（ペット）はさびしがると思う	.700	3.07(0.93)	3.46(0.98)	32.36***	.074
固有意値	7.400				

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, + $p<.10$, () 内はSD

で生きてきたため, 「社会」から必要とされるなど独自に12項目を新たに作成した。さらにペットは家族の一員として重要な位置を占めるなどの意見もあり, ペットという語も項目に含めた(項目内容はTable1参照)。「5: とてもよく当てはまる」から「1: 全く当てはまらない」の5件法を用いた。

主観的幸福感 精神的健康の測度としてWHOが開発した「心の健康自己評価質問紙(SUBI)」40項目をもとに, 伊藤他(2003)が作成した主観的幸福感尺度12項目を使用した。この尺度では高い信頼性・妥当性が確保されている。なお, 伊藤他(2003)では, 評定はもとは3件法だが4件法にして「4: 非常に〇〇である」から「1: 全く〇〇でない」まで, 回答の選択肢は質問ごとに異なる。

達成動機 達成動機は社会的動機の一つとして研究が発展した。堀野・森(1991)は自己充実的達成動機と競争的達成動機として概念にまとめ, 新たな尺度を構成した。本研究では堀野・森(1991)の自己充実的達成動機13項目を用い, 5件法で評定させた。

結 果

尺度構成

自己有用感については, 分布はTable1にみられるように, 不適切な項目はみられなかった。主成分分析を行い, すべての項目で高い主成分が得られ, 固有意値は7.40と高く, 分散も61.67%で,

α 係数は.94と非常に高く, 内的一貫性が示された。以下, 得点は尺度に含まれる項目の単純加算値を項目数で除した値を用いた。

男性の平均値は3.23($SD=0.67$), 女性の平均値は3.43($SD=0.66$)で女性の方が高く($t(772)=4.16, p<.001$), ジェンダー差がみられた。

次に, 達成動機について, 元の尺度では大学生を分析対象としているため, 改めて尺度の検討を行った。分布では「人に勝つことより, 自分なりに一生懸命やるのが大事だと思う」が4.19($SD=0.87$)とわずかながら天井効果がみられ, また, 主成分分析における負荷量も若干低かったのをこれを除き12項目で尺度構成した。 $\alpha=.90$ と非常に高く, 内的一貫性が得られた。

主観的幸福感(男性2.92($SD=0.41$), 女性2.92($SD=0.41$)), 達成動機(男性3.75($SD=0.61$), 女性3.81($SD=0.59$))ともにジェンダー差はみられなかった。

妥当性の検討

妥当性は, 各測度との相関関係から検討を行った。結果は, Table2に示す通りである。

まず, 併存的妥当性として達成動機(自己充実的達成動機)との相関をみた。社会的動機の一つとして達成動機があるが, 前向きで意欲的な気持ちと自己有用感との相関は男女とも非常に高かった。次に, 予測的妥当性として主観的幸福感との相関をみた。「自分は誰かの役に立っている」「自分は必要とされている」という感覚は年をとって

も精神的健康を高めると考えられる。Table2 にみるように男女とも高い相関が得られた。以上から本尺度の妥当性は確認された。

Table2 自己有用感と他の変数との相関関係

	男性	女性
達成動機	.63***	.51***
主観的幸福感	.52***	.45***

*** $p<.001$

世代とジェンダーによる比較

高齢者の自己有用感が年齢による世代とジェンダーによってどのように変化するか、世代 (3) × ジェンダー (2) で 2 要因の分散分析を行った。その結果、世代 ($F(2,773) = 3.23, p<.05$) で主効果が有意であり、ジェンダー ($F(1,773) = 2.78, .05<p<.10$) では主効果に傾向がみられ、交互作用はみられなかった。世代について Tukey 法による多重比較を行ったところ、60 代と 70 代の間に 5% 水準で有意な差がみられた。80 代は人数が 60 代とは極端に異なるため有意ではなかった。Figure1 に示されるように、男女とも 70 代になっても自己有用感はずっと高くなり、80 代でも極端な低下は示さなかった。

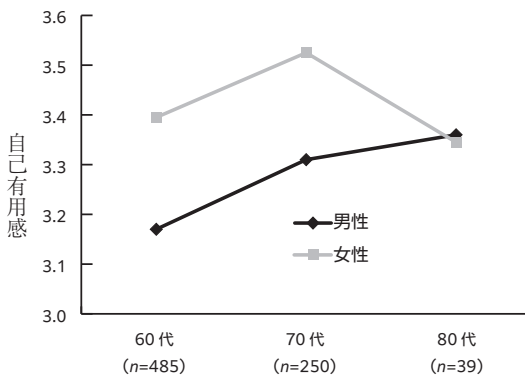


Figure 1 世代とジェンダーによる自己有用感

考 察

本研究は、高齢期の男女を対象に、自分が役に立っているという自己有用感尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とした。その結果、高い内的一貫性と妥当性が確認された。

まず、自己有用感について、「自分が必要とされている」「自分が(他者の)役に立っている」という感覚で、わが国では 1980 年代、学校適応や不登校の問題から盛んに「居場所」が問題にされ、居場所感尺度が作成されたことが本尺度の背景にある。また、生徒指導の視点から自尊感情ではあるが他者の存在を前提とした自己有用感を取り上げられ(文部科学省, 2015)それは関係性(Erikson, 1968/1969)の視点でもあった。

一方、平均寿命が延び、前期高齢者、後期高齢者、超高齢者が増加し、今では 1 世紀を生きるセンテナリアンが人々の口に上るほどになった。自己有用感が、社会で果たす役割(親役割や稼得役割など)を終え、実際に夫婦二人あるいは一人の生活になっても、「自分には役割がある」「自分は必要とされている」と思えることが精神的健康と高く結びつくことを本研究で明らかにすることができた。

この自己有用感について、本研究では明らかなジェンダー差がみられた。有意差のみられた全ての項目(10/12)で男性より女性の方が高かったのである。特に「自分が必要とされている」「自分の存在が周囲の人々の心の支えになっている」「自分には役割がある」など、自分がなくてはならない存在であることを女性は男性より強く感じていると思われる。これは高齢期になっても家事役割は終わらず、それはわが国の高齢者では圧倒的に女性が担ってきたものだからである。また、母親として子どもに関わってきた、さらにその子どもでもある孫にも多く関わっているということが(稲葉, 2002)、相手にとってなくてはならない存在と思わしめているのであろう。結婚コミットメントでみると、高齢者に多い規範型では、性役割観と関連のある規範的コミットメントは男性よりむしろ女性の方が高い(伊藤・相良, 2017)。自己有用感が「相手の存在なしには生まれてこない」感覚であり、個性性ではなく関係性(e.g. Erikson, 1968/1969; 宗田・岡本, 2005; 杉村, 1998)を前提とする感覚だからこそ女性の方が高かったといえる。実際、配偶関係でみると、数は少ないが独身者でも女性(3.23($SD=0.78$))の方が男性(2.82($SD=0.71$))より高い傾向にある($t(39) = 1.77$,

.05< p <.10). これは女性では、たとえ自分の子どもや孫、あるいは配偶者がいなくても、周囲の人との関係を作ることによって有用感を高めたものと思われる。ジェンダー差は石本（2010b）では検討されていないが、杉井・本村（1992）でも女性の方が高く、一方、Gruenewald et al.（2007）ではみられないなど、わが国における特に高齢期の性別役割分業が影響していると考えられる。

このように自己有用感は人との関係の有無が重要になってくるが、同時に個性性である達成動機とも強く関係していた。「目標をもつ」という前向きな気持ち、たとえ年齢はいついても「努力をする」「自分を深める」（いずれも達成動機の項目）ということが自己有用感を高めたものと思われる。自己有用感は自尊感情を基盤とし（文部科学省, 2015）、また、成人期以降の人々（特に高齢者）にとって精神的健康を維持し、高めるために重要な概念と思われる（Robins & Trzesniewski, 2007; 若本, 2010）。

また、世代差についてみると、70代で自己有用感はさらに高まっていた。本研究の分析では取り上げていないが、数は少ないものの40代50代に比べると60代が最も低かった。60代は子育てを終え、多く子どもは離家し、また退職を迎える年でもある。男女とも「役割」を失い、途方に暮れる年齢でもあると考えられ、それが現れた結果であろう（伊藤・相良, 2013）。これらの人々が再び自己有用感を高めたと思われる。

ただ、自己有用感が80代以降、老いに向かって一直線で低下するのか、個人差が大きく表れるのかは、また違った概念でとらえる必要があるだろう。

本研究の課題および今後の展望 本研究は、シニアといわれるおもに60代70代の人々を対象に自己有用感尺度の作成を行った。これらの人々は65歳～74歳の、前期高齢期にあたる人で、後期高齢期の人はい少なく、超高齢期の人はいほとんど含まれていない。調査として回答できるのが、高齢期といっても個人差はあるが70代くらいまで、あとは個別での聞き取りが多くなってくる。多くの調査研究が、高齢期といっても70代くらいまで、80代以降は医学研究を除けば研究は少な

い（ここでは介護や認知能力なども医学研究に含める）（Atchley & Barusch, 2004/2005）。その意味で、本研究ではこれらの人々を対象にしていないという点で限界がある。

また、80代90代の人々は、長寿命化といっても人口比での数は多くなく、60代から90代までを同じ方法でつなぐことは困難である。しかし、世代を分けてでも同じ概念が世代によってどう異なるかは明らかにしていく必要があるだろう。医学研究が進み、ますます長寿命化は増すゆえに、これらのことは今後の課題といえよう。

注

- 1) ここに記された人は何らかの活動を行っているため、無活動の人も対象者に含めたいので本人と配偶者として調査した。しかし、本人以外からはほとんど調査票は集まらなかった。
- 2) 生涯学習講座受講者と配偶者の多くは学歴が高いことがわかっていたので大卒を除いた。
- 3) 高齢期は65歳以上からだが、日本では企業の多くは60歳を定年としている。それゆえ60歳からを本研究では高齢期とした。
また、80代を含めたのは人数こそ多くないものの（40/778）、自己有用感の年齢による世代変化を見るためである。
- 4) 全体に学歴がわずかに高い。web調査により大卒以上の者を除いたが、生涯学習講座受講者とその配偶者が多く、また自治会役員・NPO会員とその配偶者など比較的学歴の高い者が含まれた。

引用文献

- Atchley, R.C., & Barusch, A.S. (2004). Social forces and aging: An introduction to social gerontology. Wadsworth, a division of Thomson Learning, Inc. (アッチェリー, R.C., & バルシュ, A.S. 宮内康二 (編訳) ニッセイ基礎研究所ジェロントロジーフォーラム (監訳) (2005). ジェロントロジー——加齢の価値と社会の力学—— きんざい)
- Cheng, S.T. (2009). Generativity in later life: Perceived respect from younger generations as a determinant of goal disengagement and psychological well-being.

- Journal of Gerontology*, 64B, 45–54.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W.W. Norton. (エリクソン, E.H. 仁科 弥生 (訳) (1977). 幼児期と社会 みすず書房)
- Erikson, E.H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. New York: Norton. (エリクソン, E.H. 岩瀬康理 (訳). (1969). アイデンティティ——青年と危機——北望社)
- Gruenewald, T.L., Karlamangla, A.S., Greendale, G. A., Singer, B.H., & Seeman, T.E. (2007). Feelings of usefulness to others, disability, and mortality in old adults: The MacArthur study of successful aging. *Journal of Gerontology*, 62B, 28–37.
- 堀野緑・森和代 (1991). 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因 教育心理学研究, 39, 308–315.
- 稲葉昭英 (2002). 結婚とディストレス 社会学評論, 53, 69–84.
- 稲葉昭英 (2008). 配偶関係と精神的健康——結婚で得るのは男か女か? —— 柏木 恵子・高橋 恵子 (編) 日本の男性の心理学——もう 1 つのジェンダー問題—— 有斐閣 pp.120–126.
- 井上治代 (2003). 墓と家族の変容 岩波書店
- 石本雄真 (2010a). 青年期の居場所感が心理的適応, 学校適応に与える影響 発達心理学研究, 21, 278–286.
- 石本雄真 (2010b). こころの居場所としての個人的居場所と社会的居場所——精神的健康および本来感, 自己有用感との関連から—— カウンセリング研究, 43, 72–78.
- 伊藤裕子 (2008). 夫婦関係における男性 柏木恵子・高橋恵子 (編) 日本の男性の心理学——もう一つのジェンダー問題—— 有斐閣 pp.97–119.
- 伊藤裕子・阿部敏之・菰田孝行 (2005). 児童の自尊感情を規定する自己の諸側面 児童学研究 (聖徳大学児童学研究所紀要), 7, 71–77.
- 伊藤裕子・相良順子 (2013). 夫婦の愛情と個別化志向からみた夫婦関係——中高年期夫婦を対象に—— 文京学院大学人間学部研究紀要, 14, 1–13.
- Ito, Y. & Sagara, J. (2016). Marital commitment between couples in childrearing period and in middle-aged and elderly period. International Congress of Psychology, 31th .140, PS26A–06–191. Retrieved from https://psych.or.jp/icp2016/pdf/ICP2016_Program_Final.pdf?160727 (2019 年 4 月 8 日)
- 伊藤裕子・相良順子 (2017). 結婚コミットメントからみた中高年期の夫婦関係 文京学院大学人間学部研究紀要, 18, 1–8.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 (2003). 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 74, 276–281.
- 小林美津江 (2008). 少子高齢時代の墓を考える——継承者不在と墓の多様化—— 立法と調査, 287, 86–98. Retrieved from www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/rippou_chousa/backnumber/2008pdf/20081027086pdf (2019 年 7 月 11 日)
- 厚生労働省 (2018). 平成 29 年度簡易生命表 Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life17/index.html> (2019 年 2 月 28 日)
- Loke, S.C., Abdullah, S.S., Chai, S.T., Hamid, T.A., & Yahaya, N. (2011). Assessment of factors influencing morale in the elderly. *PLoS ONE*, 6, e16490.
- 丸島令子・有光興起 (2007). 世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性, 妥当性の検討 心理学研究, 78, 303–309.
- McAdams, D.P., & de St. Aubin, E. (1992). A theory of generativity and its assessment through self-report, behavioral acts and narrative themes in autobiography. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 1003–1015.
- 文部科学省国立教育政策研究所 (2015). 生徒指導リーフ Retrieved from <http://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf18.pdf> (2019 年 3 月 3 日)
- Mroczek, D.K., & Kolarz, C. (1998). The effect of age on positive and negative affect: A developmental perspective on happiness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 1333–1349.
- 内閣府 (2018). 平成 30 年版高齢社会白書 Retrieved from https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/html/zenbun/s1_1_3.html (2019 年 3 月 3 日)
- 落合恵美子 (1997). 21 世紀家族へ (新版): 家族の戦後体制の見かた・超えかた 有斐閣選書.
- Robins, R.W., & Trzesniewski, K.H. (2007). Self-esteem development across the lifespan. *American Psychological Society*, 14, 158–162.

Rowe, J.W., & Kahn, R.L. (1997). Successful aging. *The Gerontologist*, 37, 433–440

更科功 (2018). 絶滅の人類史——なぜ「私たち」が生き延びたのか—— NHK 出版新書

相良順子・伊藤裕子 (2014). 中高年期における Generativity と達成動機との関連 日本心理学会第 78 回大会発表, 9.

佐藤美由紀・齊藤恭平・芳賀 博 (2011). 地域高齢者の家庭内役割と QOL の関連 日本保健福祉学会誌, 17(2), 11–19.

宗田直子・岡本祐子 (2005). アイデンティティの発達をとらえる際の「個」と「関係性」の概念の検討——「個」尺度と「関係性」尺度作成の試み 青年心理学研究, 17, 27–42.

Stone, A.A., Schwartz, J.E., Broderick, J.E., & Deaton, A. (2010) A snapshot of the age distribution of psychological well-being in the United States. *PNAS*, 107, 9985–9990.

杉井潤子・本村 汎 (1992). 高齢者の主観的幸福感をめぐる一研究——家族システムの構造的要因との関連において—— 家族社会学研究, 4, 53–65.

杉本希映・庄司一子 (2006). 「居場所」の心理的機能の構造とその発達の変化 教育心理学研究, 54, 289–299.

杉村和美 (1998). 青年期におけるアイデンティティの形成——関係性の視点からのとらえ直し—— 発達心理学研究, 9, 45–55.

田淵 恵・中川 威・榎藤恭之・小森昌彦 (2012). 高齢者における短縮版 Generativity 尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 厚生指標, 59, 1–7.

栃木県総合教育センター (2013). 高めよう自己有用感 Retrieved from http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/cyosa/cyosakenkyu/h24_jikoyuyokan/ (2019 年 3 月 3 日)

宇都宮博 (2014). 高齢者の結婚生活の質と心理的適応および余暇活動——関係性ステータスの観点から—— 高齢者のケアと行動科学, 19, 45–62.

若本純子 (2010). 老いと自己概念の媒介機能から捉えた中高年期発達の機序 風間書房.

若本純子・無藤 隆 (2006). 中高年期における主観的老いの経験 発達心理学研究, 17, 84–93.

(受稿日 :2020.4.27 受理日 :2020.10.15)